

貨幣博物館(東京都中央区)

文責：東京工業大学 春本高志

(2021年8月訪問)

今回は、東京駅から徒歩数分と交通至便な中央区日本橋にある貨幣博物館を紹介する(図1)。貨幣博物館は、日本銀行創立100周年を記念して設立され、かつての金座：金貨製造拠点であり現在の日本銀行本館⁽¹⁾と道を挟んだ隣(別館内)に位置する。貨幣コレクター田中啓文氏の収集品を基にした、金銀の大判・小判などの他、現在の国内外の貨幣、更には、お金に関する古文書なども展示されている。博物館としての規模はあまり大きくないものの、それ故に、1時間程度の短時間で、日本の古銭・貨幣を中心に、現在に至るまでのお金の移り変わりを網羅的に見ることができ、東京観光の際にはおすすめである。

さて、博物館に入るためには、なんと、空港の搭乗口と同じような金属探知機による検査を受ける必要があり、入口には担当警備員の方が多数待機されておられるため、正直なところ、気軽に入るのには躊躇する。お金は不要である(入館無料)が、代わりに、勇気を要する。しかし、それを通過し、2階の展示室へ行くと、普通の博物館と同じ空気となる。展示品は、紙幣コーナーを除いては、どこを見ても金、銀、銅の貨幣であり、入り口のものものしい検査が保安上必要とすぐに理解できる。多くの展示品の中、美術品として、また、金(Au)そのものとしても圧倒的な存在感・輝きを放っていたのは、微細な紋様が刻まれた高純度 Au の分銅金、並びに、滅多に目にすることのできない本物の黄金大判・小判である。



図1 貨幣博物館の外観。

科学館で見つけた金属材料！

“黄金小判は、実は Au-Ag 合金”

黄金に輝く小判は、その色ゆえに、ほぼ純 Au と暗黙の裡に信じている方が多いと思う(実際、筆者もそうであった)。しかし、実は、純 Au ではなく、金-銀(Au-Ag)合金ということを示す展示で知ることになる。

具体的には、小判の Au 純度は、基本的には、時代とともに低下し、反対に Ag の比率が増えていくとのことである(図2)。これは、幕府の財政状況悪化時などに、従来の小判を溶融して、Ag を追加で添加し、小判の枚数を物理的に増やすという「改鑄(かいちゅう)」が行われていたためとの説明書きがあった。今の金融政策と類似している点で、歴史は形を変えて繰り返されているのかもしれない。

しかし、お金としては、見た目(黄金色)も大切であり、「色付け・色揚げ」という工程を通して、見た目を黄金色にする(図3)。博物館学芸員の方にお伺いしたところ、表面処理の一種であり、Ag を選択溶解させ、表面の Au 純度を高

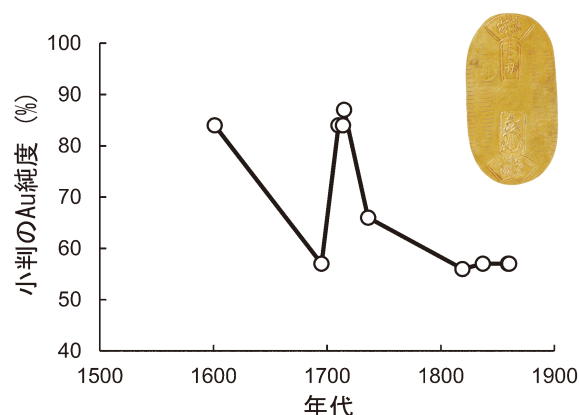


図2 時代と共に変化する小判の Au 純度。写真は、安政小判 (Au 純度：57%)。純度の割に黄金色であることが色付け工程の成果。(貨幣博物館所蔵)



図3 色付け工程を記した金座絵巻。(貨幣博物館所蔵)

める化学的なプロセスとのことである。ある種の脱合金処理と思われるが、ここで、黄金小判の製造プロセスを、刻印・細工や揮毫などの貨幣の制度的・芸術的な工程は別にしてまとめると、金属工学的には、

1. 鋳造
2. 鍛造
3. 脱合金

の3つである。初めの2つは、普通の作り方であるが、最後の3つ目には驚いた。というのも、ラネーニッケル触媒などに代表されるよう、脱合金は、近代に入ってから技術と(少なくとも筆者は)認識していたが、実は、黄金に輝く小判製造技術の一部として、数百年もの昔から行われていたようだ。したがって、昔も今⁽²⁾も、お金の製造には、その時代として、かなり高度な技術が使われてきたのではないかと感じる。しかし、昔は、悪く言うと、Au純度を落としたことをあからさまにしないための技術だった(ある意味、幕府が民をだましていた)のに対し、今は、だまされないための偽造防止であり、技術の使われる方向性が全く異なっている点は興味深い。いずれにしても、金属工学的な観点では、純度が違っているにも関わらず、ほぼ同じ黄金色に見える小判の展示は非常に面白い。是非、足を運んで現品を御覧頂きたい。

博物館では、完成された貨幣だけでなく、作製途中の中間状態の貨幣も見ることができる(図4)。砂型鋳造によって、

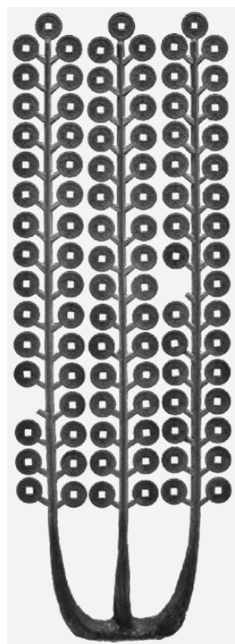


図4 枝銭。(貨幣博物館所蔵)

鋳込んだ直後の銅銭が(実際の鋳込みとは天地が逆になった状態で)「枝銭(えだせん)」として展示されているが、こちらは、かなりの大きさであり、鋳込み技術として高度だったとわかる。品質・形状の揃ったお金を作るために、幕府は努力を続けてきたようだ。現代に至るまでのお金の展示を通して、日々当たり前に使っている硬貨も、実は、長い歴史の中で改良が重ねられ、進化してきた産物と考えさせられる。なお、現代の硬貨は、鋳造で直接鋳込むのではなく、圧延板からの打ち抜きである⁽³⁾。

最後に、お金に関する古文書の1つとして展示されている江戸時代の「人間一生入用勘定」は、人が一生で使用するお金の一覧が記載・計上されており面白い。かなり詳細に記載されているようだが、残念ながら解読はできなかった。しかし、その結論が円グラフとして表示されており、一生の支出のうち、酒代の占める割合は、実はかなり大きいとのこと。江戸時代と現代では物価の状況が異なり単純比較はできないものの、嗜好品にはお金がかかるという点では同じなのかもしれない。お金の博物館だけあって、お金の使い方の勉強にもなった。

文 献

- (1) 金座(きんざ)の歴史, 日本銀行金融研究所貨幣博物館(2015)(銀座の打ち間違いではない)。
- (2) 石本卓也: まてりあ, **59**(2020), 448-449。
- (3) 造幣局ホームページ, 貨幣の製造工程(その1).
https://www.mint.go.jp/operations/production/operations_coin_process01.html(2021年8月4日閲覧)
(2021年8月10日受理)[doi:10.2320/materia.60.653]

貨幣博物館へのアクセス

- 地下鉄 半蔵門線 三越前駅(B1出口)から徒歩1分
- 地下鉄 銀座線 三越前駅(A5出口)から徒歩2分
- 地下鉄 東西線 日本橋駅(A1出口)から徒歩6分
- JR 東京駅日本橋口から徒歩8分

(〒103-0021 東京都中央区日本橋本石町 1-3-1

日本銀行分館内)

<https://www.imes.boj.or.jp/cm/>



その他: テレビ番組などで登場する「1億円の重さを体験できます」コーナーは、新型コロナウイルス対策のため、残念ながら現在は休止中とのこと。